

発刊の辞

現在、本学は、二学科五フィールドの編成で、日本の短期大学の学生激減期を乗り切ろうとしています。その新二学科のうちの一学科が日本文化学科で、本誌は、その学科所属教員の研究・教育の機関誌として誕生することになりました。

日本の短期大学は、多くが、日本経済高度成長期の昭和四十年代中葉、時代の要請に依って開学されました。本学は、少し早く昭和四十年に国文科・家政科が認可され、その後、初等教育・日本史・商学まで擁する五学科となりました。本学科三フィールドの前身三学科は、「野州國文學」「栃木史学」「國學院商学」を刊行、自負するところです。

ただ、この国の少子化に伴う十八歳人口の減少はいかんともしがたく、学科の再編を迫られるに至りました。学科名もフィールド名も、前学科名称を背負つての、さらには研究各領域を背負つての議論であつて、これ以上の妥協が許せないなかでの日本文化学科でした。フィールド名については、文部科学省の担当官との折衝もあつて、認可がいただけるかどうか、正直なところ、考えなければなりませんでした。

科学としての研究が前提となつて、そこに学会が編成されたり、学部や学科が認可されたりするものと認識しています。しかし、この時代の学科については、改組を迫られた結果の学科やフィールドもありました。その事情は事情として、今の日本の短期大学としては数も限られることになつた日本文化の研究・教育の場において戦い抜くことを誓ひ合つて、日本文化学科教員となつたのだ

と思わなければならないでしょう。私は、そう自覚しております。

改めていうまでもなく、私どもは、国際化のなかの日本に生きています。グローバル化のなかで、最も必要な姿勢は、自国文化の海外に向けての発信です。多言語・多文化のなかで見えなくなってしまう自国文化を、その発信に先立って確認しようとするのが、いま、私どもがみずから取り組もうとしている研究と教育とです。

時、あたかも、国は、国立大学の人文社会科学関係学部廃止を国家戦略の一つに数えています。文系軽視と憤る前に、そのように軽んじられない研究と教育との成果を心掛けなければならないでしょう。本学は、幸い、この厳しい時代になって、むしろ、全国から応募がいただける大学になりました。このような時代となったことで、日本の各地から、そして、世界からも、注目していただける存在になりうるものと確信しております。

学科改組にご尽力くださった前学科長鍛代敏雄教授には、本誌発刊への思いを残して、ご専攻領域の先輩からのご要請を受けて他大学へ転出されました。後をお引き受けくださった現学科長酒寄雅志教授が、いっそう意欲的にお取り組みくださって、この創刊号発行に漕ぎつけました。編集の具体的な作業には大山尚准教授が、多様な領域の原稿のご整理など、直接お進めくださったと伺いました。この『日本文化研究』が、広く人文社会科学の研究と教育とに大きな刺激となることを期待して、発刊のご挨拶といたします。

平成二十八年三月二日

学長 中村 幸弘